

「再臨のメシヤは、独り娘に出会う前に家庭を持つてはいけなかった」というみ言について

二〇二四年二月二十二日(天曆1月13日)の神トッブガン第一期出征式において、真のお母様は「再臨メシヤの責任をなさなければならぬ方は、独り娘に出会う前に自由に家庭を持つてはいけません」と語られました。このみ言に対し、真のお父様の自叙伝の「ひたすら祈りに精進し続けるうちに、結婚する時が来たことを直感しました。神の道を行くと決めた以上、すべての歩みは神の支配下にあります。祈りを通して時を知れば、従わざるを得ませんでした」(97ページ)というみ言と矛盾しているのではないのでしょうか、これをどのように理解すればよいのでしょうか? という、問い合わせがありました。

これに対し、どのように捉えるべきなのか、以下、教理研究院の見解を述べようと思います。

注 真のお母様のみ言や「原理講論」等は「青い字」で表示しています。

結論から述べると、真のお母様のみ言は真理であり、かつ真のお父様のみ言も真理であるということです。

一、真のお母様だけが「独り娘」まず、真のお母様だけが「独り娘」であることを確認してお

きます。真のお父様は一九六〇年以前の結婚について、それを「聖婚」とは言われず、人類の「真の父母」が立ったとも宣言しておられません。一九六〇年の真のお母様との聖婚で、初めて「真の父母」を宣言され、人類の血統転換である「祝福式」を始め

歴史上に……現れた主人公だというのです」(マルスム選集148-41)

このように、真のお父様は、真のお母様に対し「墮落していないエバ」「墮落していない純粋な血統をもって生まれた方」「神様を根として初めて……現れた」等々と語っておられます。

二、天の父母様の理想と「独り子」の顕現

ところで、真のお母様は、天の父母様(神様)の創造理想について、次のように話されます。

「神は天の父母様であり、それに似た実体としてアダムとエバが創造されました。人間始祖には成長期間があり、完成の位置まで進まなければなりません。しかし彼らは墮落することになり、独り子と独り娘ではなく、始まりと終わり(アルパとオメガ)が同じです。天の父母様は、

必ず目的を果たさなければなりません。それで、救援摂理歴史が始まりました。

墮落によって失った独り子と独り娘を取り戻さなければならぬのが復帰摂理です。本来、アダム・エバが墮落せず、天の父母様を中心に「聖婚式」を挙げるのが天のご計画でした。そのため、失った神の血統を復帰して、神は独り子と独り娘を地上に迎える摂理をされました。マリヤは、絶対信仰でタマルの胎中聖別の勝利圏を相続し、独り子・イエス様を誕生させました(み言の要約)

そして、人類歴史の終末期には「独り娘」が現れて、天の父母様の夢である「聖婚式」がなされなければなりません。

「エデンの園」(創世記)で果たせなかった「聖婚式」、すなわちアルパ(始まり)の出来事を、終末期(再臨のメシヤの時)に、オメガ(終わり)の出来事

られました。この事実が、一九六〇年以前の方との結婚が、人類の真の父母が立ったわけではなく、そのため祝福式は行われず、独り娘ではなかったことを意味しています。

一九六〇年の「聖婚式」で、真のお父様はそれを「小羊の婚宴」と呼ばれ、初めて人類の「真の父母」が立ったことを宣言されました。

この「聖婚式」によって、人類の血統転換である祝福式を即座に始められました。すなわち、一九六〇年の「聖婚式」で、人類歴史上、初めて「真の父母」が現れ、血統転換がなされるようになったのです。この事実は、韓鶴子・真のお母様だけが「独り娘」であることを意味しています。真のお父様は一九六〇年にやっと「独り娘」を探し出されたのです。

真のお父様は、次のように語っておられます。「お母様になる人は、……そ

として、神の願いである「聖婚式」が行われるというのが、ヨハネの黙示録第十九章の「小羊の婚宴」です。

それでこそアルパが始まった天の父母様のご計画を、オメガが締めくくり、始まりと終わりを一致させることができます。

このような観点から見ると、真のお母様のみ言「再臨メシヤの責任をなさなければならぬ方は、独り娘に出会う前に自由に家庭を持つてはいけません」と語られるのは、創造原理的な観点からのみ言なのです。つまり、唯一の独り子と唯一の独り娘が、天の父母様を中心に「聖婚式」を挙げるのが、エデンの園での理想であるため、終末期に、それを完結させる「聖婚式」は、独り子の使命を持つて来られる方と独り娘の「小羊の婚宴」でなければならぬということです。それでこそ、アルパとオメガが一致します。そのような意味において、真のお

真の父母様宣布文サイト、3月2日の掲載文↓



3月7日の掲載文↓



の第一の条件は、どのような血筋に生まれついたかということです。サタン世界から讒訴され得る血統の因縁をもって生まれたのか、そうでなければそれを乗り越えることができる血統的内縁をもって生まれたのかということが重要です」(「真の御父母様の生涯路程」⑩ 22〜23ページ)

そして、真のお母様について次のように語っておられます。

「墮落前のエバを探し出さなければなりません。墮落していないエバを探し出して、小羊の宴会をしなければなりません」(「祝福家庭と理想天国(Ⅰ)」584ページ)

「新郎であられる主がこの地上で探される新婦は、墮落圏内で探す新婦ではありません。墮落していない純粋な血統をもって生まれた方を探すのです」(同、909ページ)

「鶴子様は根が違うというのです。神様を根として初めて、

母様が語られるみ言は真理です。

三、神の復帰摂理で展開された「摂理の両面性」

ところで、真のお父様が自叙伝「平和を愛する世界人として」で語っておられる内容も、真理であることを理解しなければなりません。真のお母様のみ言とお父様のみ言は矛盾するものではなく、神の摂理から見ると一致しているのです。

例えば、神の復帰摂理におけるモーセ路程に対して、『原理講論』は「モーセは、自分の同胞が、エジプト人によって虐待されるのを目撃し、火のように燃えあがる同胞愛を抑えることができず、そのエジプト人を打ち殺してしまった」(357ページ)と論じています。ところが、このことについて、真のお父様は「本当ならモーセはエジプト人を殺してはいけな

「再臨のメシヤは、独り娘に出会う前に家庭を持つてはいけなかった」というみ言について



かった」として次のように語っておられます。

「モーセに血気がなく、知恵深かったならば、エジプト人を殺したであろうかというのです。モーセがじっとしていたならばエジプトの主権を受け継ぎ……カインの国を復帰した基盤で、イスラエル復帰が自動的に展開されるのです。しかし、モーセが血気をもって人を殺すことによつて、これが途絶されたという事実を知らなければなりません」(『宗族的メシヤ』光言社、110ページ)

すなわち、モーセのエジプト人の殺害は、本来、第一義的に、神が願われていたことではなかったと、真のお父様は語っておられます。

次に、創世記第二十七章のヤコブと母リベカが、エサウと父イサクをだまして祝福を奪ったことについて、『原理講論』は「長

子の嗣業を復帰しなければならぬ使命をもって胎内から選ばれたヤコブは、次子の立場から、知恵を用いて、パンとレンズ豆のあつものを与えて、エサウから長子の嗣業を奪ったのであるが、ヤコブは長子の嗣業を重んじてそれを復帰しようとしたので、神はイサクに彼を祝福させた」(332ページ)と論じ、これが神の摂理であつたとします。

しかし、このように展開された復帰摂理の内容も、第一義的な神の願ひではなかったとして、李耀翰牧師は次のように語っています。

「リベカはエサウを本当に気の毒に思わなくてはいけない。ヤコブは自分の主管圏でよく言うことを聞くから、もうそんなに愛する必要はない……それよりも、よく聞かない者を愛する。……(父イサクをだまさずに)エサウを愛していたら、ヤコブ

の毒に思わなくてはいけない。ヤコブは自分の主管圏でよく言うことを聞くから、もうそんなに愛する必要はない……それよりも、よく聞かない者を愛する。……(父イサクをだまさずに)エサウを愛していたら、ヤコブ

ことができませぬ。

エデンの園(創世記)で果たせなかつた「聖婚式」、すなわちアルパ(始まり)の出来事を、終末期(再臨のメシヤの時)に、オメガ(終わり)の出来事として、神の創造理想である「聖婚式」が行われるというのが、ヨハネの黙示録第十九章の「小羊の婚宴」です。このような観点から見るとき、真のお母様が「再臨メシヤの責任をなさなければならぬ方は、独り娘に出会う前に自由に家庭を持つてはいけません」と語られるみ言は、終末期において、独り子の使命を持つて来られた方が唯一の独り娘と出会い、天の父母様を中心に「聖婚式」を挙げるというのが、本来の神の願ひであるという意味です。

それが「小羊の婚宴」でなければならなかつたというのであり、創造原理的な観点から見た摂理観です。それでこそアルパとオメガが一致します。そのよ

うな意味から、真のお母様が語られるみ言は真理です。

一方、真のお父様の自叙伝『平和を愛する世界人として』の「ひたすら祈りに精進し続けるうちに、結婚する時が来たことを直感しました。神の道を行くと決めた以上、すべての歩みは神の支配下にあります。祈りを通して時を知れば、従わざるを得ませんでした」(97ページ)も真理なのです。

すなわち、エデンの園のアダムとエバが責任を果たせず、ヤコブの時のレアとラケルが責任を果たせず、さらにイエス様の時のマリヤとエリサベツが使命を果たせず、再臨主の時にキリスト教が使命を果たせない中で、真のお父様が自叙伝で語られる「神の摂理」が展開されたと言えるのです。

したがって、真のお母様のみ言は真理であり、かつ、真のお父様のみ言も真理であるということです。

五、上記の内容に対する補足説明  
上記の内容の最後で、「再臨主の時にキリスト教が使命を果たせない中で、真のお父様が自叙伝で語られる「神の摂理」が展開されたと言える」と述べましたが、この点について、もう少し補足を加えておこうと思います。

まず、韓国キリスト教においては、神が特別に再臨主のために準備した「神霊集団」である李龍道牧師、金聖道の聖主教、許浩彬の腹中教の流れがありました。この集団の信仰は「肉身をもって来られる再臨主」を待ち望んでおり、これらの人々は「天から多くの教えを受け……再臨主が肉身をもつた人間として、韓国に来るであろう……エバがどのように墮落したかという内容を……大体その輪郭的な内容は霊界から教えてくれた」(『真の御父母様の生涯路程②』

37〜38ページ)というのです。真のお母様はこの「神霊集団」の信仰の背景を持つてお生まれになつた方であり、神によつて「独り娘」として特別に準備された唯一の方なのです。

その流れと違い、一般の既成キリスト教の信仰は「神霊集団」と異なる信仰観を持ち、二千年前に復活したイエス様そのものが「天の雲に乗って来る」と信じます。第一の方である崔氏一族は、「主が人として来るといふのは、偽キリストだ」(同、68ページ)という信仰を持っており、真のお父様を再臨主として受け入れることが難しい背景を持つていたのです。

イエス様そのものが「天の雲に乗って来る」というのが一般のキリスト教信仰です。アメリカ社会では、再臨主が天の雲に乗って来て、その際「空中携挙」(注・イエス・キリストを信じていた死者はよみが

えり、生きている熱心な信者も天に引き上げられて、主と共に生きるようになること。前テサロニケ第四章17節)されると信じる人が多くいます。その信仰観に基づいて書かれた小説『レフト・ビハイインド』が累計6500万部も売れた(公式サイト発表)ということからも、そのような信仰を持つ人が数多くいることが分かります。このような信仰と軌を一にする崔氏一族について、真のお父様は次のように語っておられます。

「大韓民国と既成教会が一つとなつて、聖進のお母さんを前に立てて反対しました。私がこのような世界的使命を担つた、ということを知りませんでした。自分の母親と組んで、『主が人として来るといふのは、偽キリストだ』と言つたのです。……(崔氏一族が)反対するようになるとサタン、側の世界に戻つていくのです」(同、68ペー



すなわち、第一の方は、真のお父様を「夫として」愛してはいましたが、神霊集団の信仰の流れではないために、お父様が「再臨主」であるとは夢にも思っていないのです。それゆえ「既成教会が反対するの、聖進の母親が反対するようになっていく」(同、237ページ)という状況になりました。この事実は、神に準備された神霊集団の流れをくむ金百文牧師の信仰と異なっており、崔氏一族の信仰は、金百文牧師が信仰を立てるかどうか、それ以前の問題でした。

「先生と聖進の母親との家庭が破綻したのは、既成教会のゆえでした。韓景職牧師を中心とする永楽教会ゆえにそうなったのです。離婚させるために、聖進の母親のいとこを引き入れたのです。邪悪なサタン、悪魔の教祖と言って……永楽教会全体

ムとして来られるイエス(と再臨主)が、人類をサタンの側より神の側へと復帰するためには、神から見捨てられる立場にあっても、なお自ら進んで神に侍り奉らなければならなかったのです。神が十字架にかけられたイエスを見捨てられたのは、このような理由に基づくものであった(276ページ)

このように、再臨主も「神から見捨てられる立場」にあっても、なお自ら進んで神に侍り奉らなければならなかった」と論じられています。それは、二千年前、イエス様が独り娘を探し出せず、悲惨な路程を歩まれたことを、再臨主も同じ立場を通過することで、イエス様の悲しい心情を解放し、神様を慰労していかれたと考えられます。『原理講論』は、再臨主の路程を次のように論述しています。

「再臨主は、初臨のときの復

が主導となって、『異端はつぶすべきだ』と『平安北道の恥だ』と言って、裁いたのであります。……『自分の一族が、自分の母親を中心として家族会議を開き、全体が一つになって、文先生とは信仰が異なるので、家庭を破綻させ、離婚をさせるために煽動的なことをした』……というのです(『真の御父母様の生涯路程』③ 148-149ページ)

崔氏一族は、真のお父様を再臨主として信じていることができないキリスト教信仰の背景を持ち、次のように反対したのです。「聖進の母親が狂ったように反対したのです。……二つの道があるということが分からなかったのです。……レバランド・ムーンが(再臨主として)現れる時も、二つの道があったということを知らなければなりません。……(聖進の母親は)『自分の夫としてのみ見てくれ』と言うのです。……エデンにおい

帰摂理路程を蕩滅、復帰しなければならぬので、あたかも彼の初臨のとき、ユダヤ民族の不信によって、霊的復帰路程の苦難のときにおいても……その霊的な苦難の路程を、再び実体をもって蕩滅復帰されなければならない(427ページ)

このようにイエス様が通過された路程は、独り娘と出会えない悲惨な路程でした。再臨主も同じ「悲惨な路程」を歩まれたにもかかわらず、なおも神様の前に絶対信仰、絶対愛、絶対服従の道を行かれることで、真のお父様は「創造本然の人間として……神を慰労してあげなければならぬ」かったのです。そうしてお父様は、神が準備しておられた「独り娘」をやっと探し出されたのです。

以上が、この問題に対する教理研究院の見解です。


て、一人の女性によって天地が滅ぼされたのですが、今日の復帰時代においても、一人の女性によって……悲惨な歴史を残したことを、私は悲嘆したのです(同、149ページ)

結論として、崔氏一族には真のお父様を再臨主として信じている信仰がなく、第一の方も、お父様を再臨主としてではなく、ただの夫としてのみ見ていたというのです。再臨主に対し「二つの道」があり、本来、再臨主として待っていかねばならぬのに、「偽キリスト」として捉える信仰により、やがて夫としても、見ることができなくなっただけです。それゆえ、金百文牧師が信仰を立てるかどうかの以前の問題があり、こうして「既成教会の信仰を持つ」聖進のお母さんがみ旨を立てることができなかつたために、三代にわたって延長されることになりました(同、156ページ)


こうして真のお父様は、真の母を探し路程をその後も歩んでいかれ、神霊集団の背景を持つ、天に準備されていた独り娘・真のお母様を見いだされたことが理解できます。崔氏一族の不信の問題は、金百文牧師の信仰問題と関係がなかったと言わざるをえません。


では、なぜ真のお父様は、神様から否定されるこのような道を歩まれる運命に立たされたのでしょうか。『原理講論』に、イエス様、再臨主に対する次のような論述があるのをご存じでしょうか？


「人間が神のみ旨に反して墮落することによって神を悲しませたのであるから、これを蕩滅復帰するためには、これと反対に、我々が神のみ旨に従って実践することにより、創造本然の人間として復帰し、神を慰労しあげなければならぬのである。……したがって、後のアダ


Blessed Life 


2024年の感想数ランキングをご紹介します!  
(2024年1月1日~3月10日)


1  小説・お父さんのまなざし


 心を温かくしてくださり  
ありがとうございました♪(男性50代)

毎週土曜日に感想の共有も 

2  み言おみくじ

 とても画期的で心躍りました。  
(女性30代)

3  み言福袋

 自分にピッタリなみ言が与えられました。  
(女性20代)

今年もすでに200件以上の感想が!

このコードからアプリをダウンロードしてみね。 